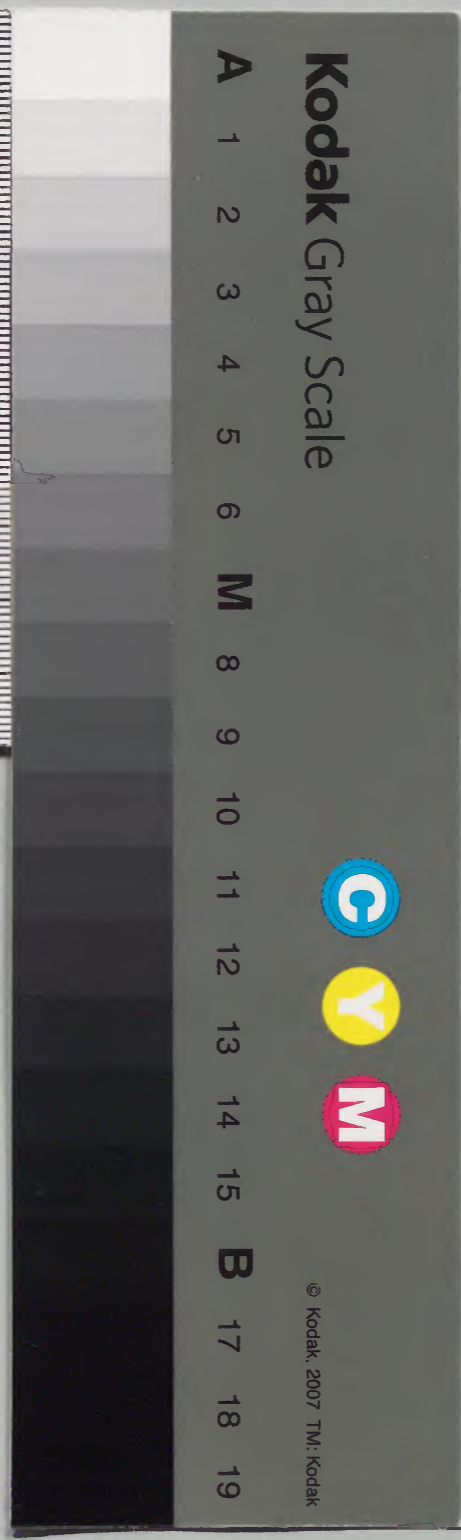


日本書紀傳 廿九卷九

和書
一〇五二二號

内閣文庫		
番號	和	10522
冊數	156 (110)	
函號	特	85 1

内閣文庫



教部印

圖書印

内庫印

八月十九日接了
系教口於三教

三教書

日記之於傳三十九
此書好はありぬ
行々あり

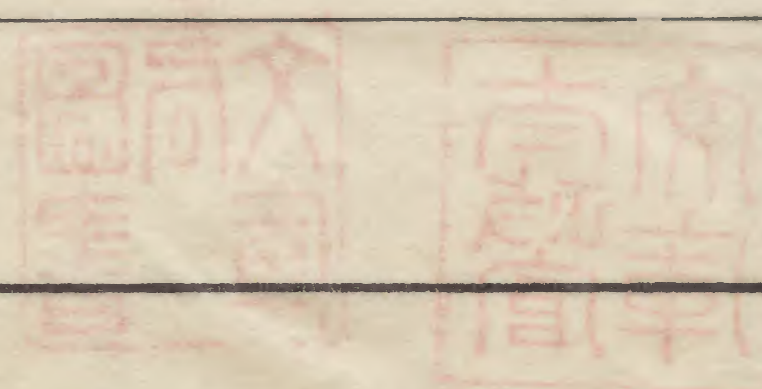
内一四六八三號

あり俗は麻多具良と云股谷より由あり三十一此
邪ハ同抄ハ膝比脛頭也と有り三十一ハ波伎ハ同抄
ハ脛和名波岐也釋名云脛莖也言似物莖也二見四三
十一ハ故無羅ハ同抄ハ腓古無脚腓也と有り三十二
ハ玖毘須ハ同抄ハ跟和名久比須足踵也踵足後也
見えたり三十四ハ婀娜洋藥ハ同抄ハ距字亦作蹠和名阿奈字良
足下也二有り右ハ内外より疼痛を成す者の太抵を
舉ぐれたるめて其細らる事に至りてハ略り小た
り一者あり以上右三百四十七下より此小至る迄ハ
へきせ給へる者あり少彦名命の御言よ出て一切の痛因を傳
非れども又他の古書ハ傳りざら古言も多ク有て

○日本書紀傳二十九

○四百十一

甚變たき者あり右行二百九十五下より三百四十六下
に至る迄ハ謂ゆる内經の説あるを此病國の説を
合せて一切の諸病の起る所以を知る時ハ病を瘡
る法此中より生れて甚明くけき者あり予醫人又非
此ども此事を説得て大を得る所有る心ハ漢も非
蘭も斯計り委しく詳る人身の説ハ又世も非
くと思ゆを仲景の奴隷の東垣丹蹊の下凡そ
立て其愚けきお至りてハ大戎を李びて医ハ彼小盡
せる者と思ふ愚入さへ五月蠅成す多く成以て行
如何や彼ハ大戎ハ畜肉を屠り食いて皇大御國
の如き可美瑞徳を賜ひ食す此大御寶ハ素より異
ある者ありて殊に凡上の相違ハ有北ハ皆かく此
小用あり車ハ大不害有る後ハ死ハ斃るをも知す
富也且病を瘡すと云ふり導きて候伯の家より入り
彼ハ美を語りて我を陋いとす方今文武は疎く名分
は暗き士人の悉く欺れて皇國の寶貨を渡して外夷
の賤物と換へて大戎の礼節を盡して朝廷は非礼を
く心有る輩此を歎けざるハ非礼ども医瘡と藥物
こハ彼を勝れりて新膏を瘡から我上古よ



柱神の珍宝と天下小照耀やく底宝御宝主の神語共
を傳へ遺させ御在し坐けるをも跋り知ざるハ我
美玉有るを念れて隣の瓦礫を宝と為るよ似たり憐れ
む可く且哀しむ可き事共あるに有ける此安政六年
十月より始めて此二柱神の御靈をいし○下卷よ至
光を天下小遍く照さむと思ふハ如何小○下卷よ至
少てハ上二百十小謂ゆる瘡病之方の則あり其方ハ
しも^上三百四以下小説注せる味座乃倭訶知と云て
都て八門小差別たせ御在し坐ける是あり此ハ其八
科小定めさせ御在し坐ける其病症小就て藥劑小就
用ふる法度是あり其文小云く乃^法別味^度太羅依武智乃
宿祿乃古登仁云くと見えて此以下ハ悉く其宿祿命
の言よ出たなり者ありて二柱神の神代を去て夏小去

て後の定めある事ハ然る物小て今云限よある非り
けりを此小古小思及ちして此宿祢命の言の二柱神
小出たる事を亦思はずハ有べりし故情考ふる此
大己貴命少彦名命二柱神等兄弟とさへ小成りて御
在り坐て天下蒼生の爲小療病と禁厭との御事を
も不足ぬ事毎て物爲させ御在り坐ける中大己貴
命ハ一も專御カを人身の條理コトモよ盡させ御在り坐て
少彦名命此小亞ぎ少彦名命ハ一も全く御心を病災
の基本小任ぬさせ御在り坐て大己貴命此小亞せ御
在り坐て互小相持り別させ御在り坐て備さ小明く

め物爲させ給へる趣あり然りて雖も人身此小始ま
の病災本マ起り拾る拾あり非りければ古おも如何ハ
其説の毎るさるゝ然りと雖も物毎小素林朴あり一當
昔小ハ人皆天地の惟神ある氣を養ひてのそこ有
けり然るる一病災小罹る事も少りけり一
病災と云事も少く邂逅小其事有れば其時ハの状よ
隨ひて治めけり一強小病の基をも探る一及ハず
又其病の因を原めり一事毎れば人身の機關關を敢て
言ひて濟める事ありけりを此二柱神等天下を經營
して御在り坐て国土を善一く爲させ御在り坐よ

てハ人民其恩頼小依其蕃息ニシテ蕃息此小就テハ信して
病災と云物も多在りぬ可キ自然の勢ハ多シ有ハ
此ハ此小於テ不易の法を定め後昆世傳へさせ御在
し坐ズ得有べりハ御事共多シ此小就テ人身の
事ハ則を天地小取り病災の事ハ因を神鬼正して
詳ク小為させ給ふとしてハ古傳ハ據り衆説小合せ
て終ル右の如ク天コト成ル事ハ一有ければ上件人
身の事ハ大ニ貴命の御説あり病源の如キハ少彦名
命の御説ありと雖も必受させ御在ハ坐来御事の
御在ハ坐けし小合せて此ハ省祿命の御説と有ハ次

小此二柱神より傳ル所を以て此小定められた
る物ハ其實ハ此二柱神の御説小出たる可キ御事
申すも更ニあり然ルハ上二百九十一下ニ注せる第一
流平自免波安萬都美他麻美豆保乃計乃不多通テ加
波世云ハ有る中ハ水火氣の二と交テ事ハ推測然
為させ給ふ可キと雖も天津御靈の御事ありハ必然
る古傳の毎ハ心當ル何レ宣給ひ出ルれさせ
給ハ此一事を以て天地の初時より傳ルり来れ
る古説を承て説ハ成ル給へる御事著キ又其病因
の御説ハ然ルハ惡氣災惡味災ハ中ハ味ハ飲食
の氣災ハ呼吸ハ共ニ出入ルハ心ハ思ハ物ハ
るハ其中ハ物氣ハ何レ神ハ鬼ハ然ル為ル見テ邪崇ハありと
推量ハ然ルハ打出難キ事ハ其ハ彼伊特諾大神の
黄泉の件ハ就テ委曲ハ為サ給ふ可キめり又藥劑
の較略ハ亦然ルハ己ハ伊特諾尊ハ始メ素戔鳴尊ハ

よ成なる趣ある車上より次よ証を引て云々如く
る上ハ此小謂ゆる法度の如き正然有る可き
御事をあむ曉若て大己貴命少彦名命の傳へさせ御
る可りける神代より受賜る傳へし大己
在し坐ける醫術を皇大御国は傳へし大己
貴命より其御子車代主命其より天日方奇日方命
よ授させ御在し坐たりけり大日類聚方は大神朝
臣家方と云者多きを以て其然る所以とハ知ふ足れ
り今一ハ大己貴命の天神御子よ国土を遊奉り給ひ
て八十歳隠れ御在し坐むと爲させ給ふ以前ハ天
神御子の天下を所知看せ御在し坐す御上りてハ
何よあも天下蒼生の上を愛憐し御在し坐て大

小御恩頼を令蒙給へり日ハ急務ハ有ればハ
其此御時迄世は試みさせ給へり事筋ハ落も毎く
聞え上させ給へりけり事彼廣事を奉らせ給へり
時の御言の状を以ても著明き御事ありけり否らざ
る時御紀の此の文は其療病と禁厭とを定させ給へり
御事を承て是以百姓至今咸蒙恩頼と有るを必其方
法共よ授く神と受る人と有て其事の天下ハ遍ぬく
成り趣不見ずてハ叶ハざり可き事上二百ハ注
々知くあれハあり諸大同三年ハ勅有て阿倍眞負朝
臣出雲廣負宿禰等ハ大同類聚方を令撰給へり小就

考有り其出雲宿禰の遠祖天穗日命天夷鳥命等
就て大己貴命の方法をば天神御子小奉らせ給へり
けむり専彼家小傳おぼろ古説を注さしめ給へり
者ともい所思しりけむり況て天朝ふの歴世小神
代以来傳させ給へりけむ御事の上二の細書あり
書せり大同類聚方の長間藥赤間藥等の二方を彦太
出見尊の方と傳へ本草和名小飛廉を布保と天久
佐と有るを以て思合す可し若て武内宿禰命
も孝元天皇の曾孫よし坐^右の阿部朝臣も孝元天皇
の皇子大彥命の後あり此と純て思ふよ此天皇より

其御子等の家より傳りけむり其中武内宿
禰命の事も殊よ此事を明しめ大い得る事有て此
謂ゆる乃別味太囉依に定給へりと雖も素より其家
小受傳ふる此二柱神の注度を委しく物爲りたり
し者あり可りけむり此宿禰命の説と云物の實
小ハ其二柱命の御説ある事申すも更なる事ナリ
此よ奇しき事ハ其宿禰命ハ景行天皇御世より
仁徳天皇御世迄任奉りて其大御歌に那許曾波余
能那賀能比登と詠せ給へ大臣の答奉る歌に阿礼許
曾波余能那賀乃比登と詠たりが如く三百余歳
長寿人ありし事ハ人皆知る所あり若て其阿部朝臣
の上組たる大彥命ハ崇神天皇十年御紀に四道
將軍ハ一ノ擢り奉給ひて北陸を言向む往坐し
り此時頗る老入るが指盛ありし事此を以て知る

神皇正統記
 御事有て年
 見たり其開化
 降誕あり然る
 其川一七

古事記水垣宮
 武埴安彦命の事と
 大彦命小汝之麻呂
 と有れ此御子と
 三十歳位の時と見
 て其為六兄弟と
 大彦命を凡四十歳
 許の御子と見たり

る按ふは孝元天皇二十三年の御事御在り生けられ
 其二十三年の問に至給ふと見れ其時生坐るに
 就て儲位を升給へるを大彦命其御兄は當り也
 給へりとも實は未天位に即給ひし御子の御子
 ありし可し故熟考するに大御父孝元天皇ハ孝靈天
 皇三十二年丙午の十九歳に降誕あり即位元年丁亥
 見えたり其十八年戊子の降誕あり若其皇孫の已
 小己く六十歳に渡り給へり其時皇孫を二十許と見
 く要れ奉給へりし假令大彦命の誕生を孝靈天皇不
 十四年甲子の程に見て計るに崇神天皇十年癸己
 小凡百五十歳許の人もあるに時事として征伐に向
 べし事猶盛なり故を以て此も亦大なる長生と
 云べし後其裔ある阿信眞皇朝臣の出雲廣負宿禰と
 共し書して奉りしとや若て武内宿禰命の裔の
 紀氏とハ同族ありしとも孝元天皇の御流に
 祿命の説ハ阿信氏も傳はりしと亦知べり其後
 其

の爲に其
 端緒を開の
 ○第一段云く乃則味太囉依武智乃
 宿禰乃古登仁須惠仁登豆流毛能者濃暮世天遊流免
 无須武毛迺波非羅紀天智囉斯蒙流三問乃波止治豆
 止度免阿都滿流摸濃波免俱囉在由訶嗣耶武留二
 儻乃波都免負阿通賣伽大滿礼流母乃波九陀喜伊
 豆流聞乃波不施岐天止度迷婦九流二勿乃波分詩天
 奈保之波解新喜文乃波須民耶伽仁由流賣愈流紀
 蒙能波須民耶迦奈囉世伽路喜毛迺波智良之阿左紀
 喪濃者於比大耶須と見えたり是皮膚小在り疾病
 之療治る法度是るの一須惠仁登豆流毛能者濃暮

世天遊流免と有る須惠ハ上二百下注せる如く第五
章蕃巨條は訶波波多反波寸惠奈刹と有る是より次
二皆然し登巨流ハ閉少て穿九章は計阿奈波保乃須
惠字伊太也と有る此の變多り第九條布佐岐味坐
今阿奈字布差解者波陀於曾計奴具无と有る是より
蒸氣を閉塞いよと有る濃暮世天遊流免ハ其令計を
示されたる者よて其般不能煩世類波可室分乃毛能
又遊流女流波安滿區訶路紀茂乃と有る是より二小
无須武毛能迺波非羅紀天智羅斯と有る无須武ハ疑
結少と云るの其令計ハ非羅紀天智羅斯ハ開きて散

すを云あり即其下小比羅久波可良氣乃毛乃可遠離
有物 阿流母濃又邊羅須波何我記茂乃伽蘭支毛能と有る
是より五小裳流二閤乃波止治互止度免と云ふ裳流
三ハ腰理の締無くして漫小外小漏るを云あり此法
度よ止治互止度免ハ閉塞ぎ止息るを云ふ其令計ハ
登圖類波志婦利阿治能毛能又登武流波訶滿玖仁賀
紀毛能乃も有る是より四ハ都滿流模濃波免俱囉
古天由 訶爾の阿都滿流ハ凝聚あり此法度小免俱
囉古天由訶爾ハ運漕び行散を云ふ其令計ハ邊羅須
波と有る此ハ當り可一五小耶武留と儼乃波都

二即
外と散ととの
萬例留母也波知
見之舞三般小阿都
都萬流也乃波能
都萬流也乃波能
二算二般小阿都

二免負阿^衆通賣之有る耶武留之ハ碎破^破るあり此
法度ノ都^約免負阿^衆通賣ハ約合セ結聚^衆ると云ふ其令
計ノ每^結須婦波斯^賦保波遊喜母能^物と有る是あり六ノ
伽^瘡太湍礼流母乃波九陀喜^碎の瘡^{加太湍礼流ハ}より凝^ハを云ふ此令計
九陀喜^碎と云ハ碎破^ハると云ふ其令計ノ久陀仇波^碎可^幸
良久仁嘉喜毛能^物と有る是あり七ノ伊豆流^出聞乃波不^防
施岐天止度迷^止と有る伊豆流ハ出去るあり此法度ノ
不^防施岐天止度迷ハ防障^ハ止息ると云ふ其令計ノ布^防
世具波安^甘歸喜毛能^物又登武流波云と有る是あり八
ノ婦^數九流^物と云乃波分^消詩天奈保久之と有る婦九流^ハ
ハ腫^數數^ハるあり此法度ノ今^消詩天奈保久之ハ消散^ハ
直平ノ爲^ハるを云ふ其令計ノ邊羅須波云と有る是
あり九ノ波^割解新喜文^物乃波須民耶伽仁由流賣^緩の波
解新喜^ハ痛^{此ハ以下ハ右ノ凡テの上と云ふ中ハ其}刺^速と云ふ此法度ノ須民耶伽仁由^緩
流賣^ハ早速^リハ緩^メて其痛^と去^る事あり此令計ノ
遊流^緩女流波安^甘湍^輕區^輕訶路^輕紀^物茂乃と有る是あり十ノ愈^緩
流^紀蒙^物能^速波^速須^速民耶伽^令奈^令囉^令世^令ハ早速^成一^ハ其^速淡^速滯^ハ
ハ此法度ノ須民耶伽奈囉世ハ早速^成一^ハ其^速淡^速滯^ハ
と云ふ謂^ハあるよて其令計ノ邊羅須波^ハ勿^ハ須^速平^速波^散
云と有る此ノ當^ハ可^ハ一^ハ十一^ハ伽^輕路^輕喜^物毛^物迺^物波^散智^散

以上より以下に
右に諸症の上より
就たる事なり

△緩と速と滞と
と云

ハ腫^數數^ハるあり此法度ノ今^消詩天奈保久之ハ消散^ハ
直平ノ爲^ハるを云ふ其令計ノ邊羅須波云と有る是
あり九ノ波^割解新喜文^物乃波須民耶伽仁由流賣^緩の波
解新喜^ハ痛^{此ハ以下ハ右ノ凡テの上と云ふ中ハ其}刺^速と云ふ此法度ノ須民耶伽仁由^緩
流賣^ハ早速^リハ緩^メて其痛^と去^る事あり此令計ノ
遊流^緩女流波安^甘湍^輕區^輕訶路^輕紀^物茂乃と有る是あり十ノ愈^緩
流^紀蒙^物能^速波^速須^速民耶伽^令奈^令囉^令世^令ハ早速^成一^ハ其^速淡^速滯^ハ
ハ此法度ノ須民耶伽奈囉世ハ早速^成一^ハ其^速淡^速滯^ハ
と云ふ謂^ハあるよて其令計ノ邊羅須波^ハ勿^ハ須^速平^速波^散
云と有る此ノ當^ハ可^ハ一^ハ十一^ハ伽^輕路^輕喜^物毛^物迺^物波^散智^散

二ノ無須武母濃波。非良岐互訶餘波世と有る無須武
ハ疑結あり此法度ハ非良岐互訶餘波世ハ排開け通
達アと云ふ其令計ハ此羅久波可良氣乃毛乃可遠離
河流母濃と有る是あり三ノ九太利伊頭流母濃止度
迷天訶多迷。ニ有る九太利伊頭流ハ池瀉ヲ云ふ此
法度ハ止度迷天訶多迷。其令計ハ登武流波訶漏玖
仁賀紀毛乃モ所見たる是あり四ノ小差訶乃暮流母濃
波久陀新天伽反志ノ差訶乃暮流ハ上方ハ逆上るを
云ふ此法度ハ久陀新天伽反志ハ下方ハ池瀉す
少其令計ハ似太須波耳賀利阿地乃毛乃可良久阿婦

良安流毛濃志波半遊久於母喜毛乃モ有る是あり五
ノ訶五ノ流本濃波於新比囉紀の訶五ノ流ハ屈伏す
物あり此法度ハ於新比囉紀と云ハ押破り開散す事
あり其令計ハ耶婦流波仁賀利安地乃可路喜毛能加
羅久阿婦良氣乃毛奴と有る此ハ當る可一六ノ訶太
紀母濃波久段紀元耶武刹の訶太紀ハ痞堅きを云ふ
此法度ハ久段紀元耶武刹と云ハ碎散し破盡するの
即其令計ハ久段紀元耶武刹ハ波可良久仁賀喜毛能之有る是
少七ノ伊泥烏可布波不勢支四豆六の伊泥烏可布ハ
出浮び沈着ざるあり此法度ハ不勢支四豆六ハ防禦

め沈重りを云々其令計は布世具波安屬喜毛能又志
 巨岸流波於毛久河地奈喜蒙濃と有り是あり八よ太
 陀餘比多滿連流波於之於不の太陀餘比多滿連流ハ
 浮漂とい溜満事あり此法度よ於之於不と有ハ其
 令計よ似太須波云々又耶婦流波云々と有り是よ當
 可押ハ即沈しるる申下四百三氣之末より儲此よ以下ハ右の第八條よ分てる上の事ハ
 九よ太健久波解之紀波遊流送と有ハ右の諸症共
 各其法度ハ有れども其健く強く劇しく来る者ハ
 一先緩ゆる申あり十小河左紀波計之ハ其諸症の淺
 き物ハ其法度ハ抱ゆるず消滅すを主と爲とあり

十一小伽侶紀波耶波囉我須ハ其輕き物ハ和らるの
 之あり重きに至るまで令むる由ありて此毛右よ
 云々其の上外小療可き法度を果さればなる者あり然
 バ此も聚るると結ふと瀉ると疥りて屈りて堅き
 と出浮ぶと漂溜ると凡てハ一過さる事上あり未芽
 一段と同一○第三段よ云々蒙止仁師豆迷流母乃波
 能上保世豆免俱良並迎吳滿連流門乃波非羅岐邪累
 世伊頭流莽濃波屠地底婦轉岐差伽乃暮流世迺波於
 之底依陀志耶武婦流と毛濃波都豆賣帝止度迷誦多
 岐毛乃波區太紀貞耶文利味之俚止喜毛能波布西支
 奈滿世伽呂紀問濃波介之波解之記喪濃波由流賣由

類滿連累門乃波須美耶迦仁迷具囉世阿都萬例留母
迦波知囉新太公紀波於比之陀須と有る此は肉は在
ゆる疾病の法度あり其一は蒙止と云く上三百小舉
たる第五章蕃巨條は吉新波毛登奈刹と有る此を謂
る師巨迷流母乃波能保世且免俱良並と有る師巨
迷流ハ肉中ハ沈潜むを云ふ此法度ハ能保世且免俱
良並ハ此を上ハ升中時ハ運りて療る謂あり其令計
ハ能煩世類波可室ハ乃毛能と有る是あり二ハ迦吳
滿連流門乃波非羅岐邪累世と有る迦吳滿連流ハ屈
伏て災を爲す者あり此法度ハ非羅岐邪累世ハ開去

引ひ戸を云ふ其令計ハ比羅久波と有る是あり
三ハ伊頭流莽濃波屠地底婦熱岐と有る伊頭流ハ張
出を云ふ此法度ハ屠地底婦熱岐ハ閉塞き防衛む
るあり其令計ハ登圖類波志婦利河治乃毛能と有る
是あり四ハ差伽乃暮流母迦波於之底仗陀志と有る
差伽乃暮流ハ逆上るあり此法度ハ於之底仗陀志と
云て強て押下るを云ふ其令計ハ仗太須波云くと有
る是あり五ハ耶婦流毛濃波都巨賣帝登度迷と有
る耶婦流ハ破裂る事あり此法度ハ都巨賣帝登度
迷と云ハ約締め止息るを云ふ其令計ハ急須婦波云

登武流波云と有る此二小當可一六小訶多岐
毛乃波區太紀負耶文利と有る訶多岐ハ堅ク腫ク
云ふ此法度ハ區太紀負耶文利ハ碎挫キ破去ル其
令計久駄仇波可良久仁賀喜毛能又耶婦流波云と
有る是ありセ味之俚止喜毛能波布西支奈滿世
之有る味之俚止喜ハ走巡リ疾轉ル云ふ此法度ハ
布西支奈滿世ハ防萎セとあり其令計ハ布世具波安
喜喜毛能と有る是ありハ一伽呂紀問濃波分ハ右
の諸症の輕キハ消スとあり九ハ波解之紀喪濃波由
流賣ハ其劇トハ来ル者ハ勢を緩むる多ク十二由類

滿連累門乃波須美耶迦仁迷具囉在ハ因中ハ後帶
物ハ速ニ運行スとあり十一ハ河都萬例留母迺波知
羅新と有る此ハ石の身ハ小枚ベキ文ハ此ハ例の
凝聚ルとあり此法度ハ知囉新と有ハ散去ル事あり
此河都萬例留の法度
右の末ハ免俱囉在由訶嗣と見え中ハ能
暮世阿俱陪新と有ハ此知囉新ハ運行スと云ふ
少其令計ハ羅須波云と有る是あり十二ハ太
紀波於比久比須と有ハ諸症の健ハ交利キをハ逐瀉
セとあり右の如ク凡テ十二首あり中ハ本症ハ唯
ハのハして餘の四ハ其諸症ハ就テ有ハ状を云ル

其ハ此も沈むと屈ありと出る也逆上ると傷ると堅
キと走疾キと聚あるとのハあしと其餘も輕いと云
ハ劇しいと云い緩りとも云ひ健キと云ふハ右の
諸症の上もて疾病の浅深輕重を云ふハ別あり
と知 ○右の乃剥味太羅依ハハ皮膚の末と中藏の
中々血肉の本マニ分たして其各々令計の法有る
事を示されたり者ありハ各其類を輯めて互に得る
所有ひとす故其一ハ云ハ須惠仁登豆流毛能者濃暮
世天遊流免と有る此ハ中も本も所見す其二ハ
末條小无須武毛迺波非羅紀天智羅斯中條小无須武
母濃波非良岐互訶餘波世と有る此もて通ハすハ
散り了車を物爲る証あり三ハ漏るハ末條小濃流

本條小向都高別
留母迺波非羅紀
三行一外上
ハ又ハ散す法あり

悶乃波止治互止度免ハ中條小九太利伊頭流毛乃波
止度末天訶多迷本條小伊頭流恭濃波屠地底婦勢岐
と有る其ハ此類あり三ハ聚あるハ條小阿都濃流摸
濃波免俱羅世天由訶嗣中條小奈伽仁阿都萬流裳乃
波能暮世阿俱陪新其四ハ耶武留之儻乃波都免貞
阿通賣本條小耶儻婦流毛濃波都豆賣帝登度迷と
有る約め聚め止むるあり其五ハ漏るハ末條小
伽太滿礼流母乃波九陀喜中條小訶太紀母濃波久段
紀元耶武剝本條小訶多岐毛乃波區太紀貞耶文利と
有る碎破る是其法あり其六ハ出る物ハ末條小伊豆

流聞乃波。不施岐天止度迷中條。伊泥鳥可布波不勢。
支四巨六本條。伊頭流恭濃波屠地底婦勢岐。有て
出ら。防閑止の浮ぶ。沈しる。其ハ。穀々。ハ
末條小婦九流。勿乃波。今詩天奈保久之。有て此ハ
中本共小毎。其九。瀉出る。中條。九。太利伊頭流
毛乃波止度米天詞多迷。有る此ハ。池瀉の類多。ハ
中。在の。有。其十。差詞乃暮流母濃波久陀新天
伽反志。吐逆。又ハ脚氣衝心の類多。ハ本末共小毎
其十一。屈。物ハ中條。詞五。流木濃波於新
比羅記本條。迦吳滿連流門乃波。非羅岐邪累世。有

又遷
天
紀
比
久
陀
領

て此ハ押開き令去る。其十二。漂。溜。水。ハ
中條。太陀餘比多滿連流波。於之。於不。有。此ハ留
飲の類多。ハ外。毎。者。有。是。迄。其末中本。在
ゆ。諸症。有。此。下。其諸病の深淺緩急。就。又。別
小療。し。方。有。と。云。有。其十三。小劇。一。末條。小波
解志喜丈乃波。須民耶伽仁由流賣中條。小太久波解
之紀波遊流迷本條。波解之記喪濃波由流賣。有て
此ハ緩し。外。古。事。所見。其十四。
緩。末條。愈流紀蒙能波。須民耶迦奈羅世本條。
由類滿連累門乃波。須美耶迦仁迷其羅。有て緩滯

り速く運行すめて即令計し遠羅須と有る此の
 當り其十五の輕き末條の伽路喜毛迦波智良之
 中條の伽和紀波耶波羅我須本條の伽呂紀問濃波介
 之ハ皮膚瘡してハ散一中藏してハ和りて血肉して
 ハ消すめて病の未重りざる程の事あり其十六の
 浅きハ末條ハ阿左紀表濃者於比太耶須中條ハ阿左
 紀波計之と有て此ハ病の深く奥に入さるを療むる
 法度あり右件末條十二中條十一して健之劇とを二
 りして其七十二此本條も同半く十二して凡て三十
 六ある此を約むる時ハ疾病の部凡て十二首其形

状の部四首して合せて二十八首あり事必所由有
 べし其ハ米條中條本條共ハ其疾病と云ハ各八首有
 る其形狀の言各四首合せて十二首宛あるを
 右の如く擧て試るハ其約ハ所凡て十六首ハ過
 るあり就ハ上三百六十六下ハ中卷第五條味座乃倭
 訶知ハ門ハ其法度を皮膚瘡ハ中藏ハ血肉ハ右
 凡てハ其法度を皮膚瘡ハ中藏ハ血肉ハ右
 の如くハ首とて其元とを合せて二十八首ハ合
 事必所由有る事
 〇第四段ハ云ハ波伽羅波五ハ上
 〇謂ゆる乃剝味太羅依ハ就て其計ハ可き方を示
 給へるあり故波伽羅禮ハ云使令ハ延て令計ハ
 云あり此段十六首有り一ハ能煩世類波可坐ハ乃毛
 能と有る可坐ハ遠の遠して香氣の物を云ハ氣極

〇約りてあるハ波伽
 羅波五の十六首ハ
 不意くハ打

惠未子伽薰遠利河流蒙乃彼能上衰制天伊耶之有有是系
り二下子伏太須波耳賀利阿地乃毛乃可良久阿婦良安有
流毛濃志波半遊久於母喜毛乃有有之下下方有苦
味物又辛有油物又鹹重物を用ふと多の苦味物別味致
小仁我理安治仁於須毛乃阿利有有少辛有油物ハ氣
廻具爲末具球瑤紀茂迴波破夜武哩下元九陀周有有是
ハ鹹重物ハ味別鹹新破復波遊岐仁耶武流毛乃阿利有
有て右の三を合する小押すと破るとの二下下す
小至有ゆるめり三小登圖類波志破婦利阿治乃毛能有
有る該味ハ味別破新武喜河墜仁登有至流毛乃阿利有

有る是あり四小比羅久波辛可良久氣乃毛乃可有遠離阿流
母濃と有る辛氣物ハ下見見え有ず有薰物ハ右謂四
ろ可香室氣乃毛能有有る是あり五小耶武流波仁賀利
安地乃可路喜毛能辛加羅久阿婦良氣乃毛奴有有る苦
味輕物ハ右の第二下すハ唯苦味物有と破ると
ハ其輕き物を用ふと多めり辛油氣物下下すハ油
石を用ひ破ると油氣を用ひて氣より衝碎有くあり
此めて下すと破るとの差有る事を知べ六小久碎駄
仇波可良久仁賀喜毛能有有る此ハ大抵下すと破ると
との状似たれ七布世具波安有萬喜毛能有有る甘

物ハ味別ノ鞆麻歸阿旋仁由流米流毛乃阿利ニ有リ
 ハ防ぐと緩めり目ト治法多ありけりハ須訶
 寸波。伽路區阿治奈紀毛能ハ氣末ノ河賦難岐母能波。
 詠之望良殊と有リ此ハ合ハ九ノ志豆牟流波於毛久
 阿治奈紀毛能ハ有ハ右ノ透すと沈むと共ニ每味物
 の輕重ハ因ニ別々ノ之ト十ノ有類保須波阿末玖滄
 流室不蒙區之有ハ氣末ノ阿治與枳蒙奴波由流女宇
 流室須と有リ是あり十一ノ遊流女流波安滿區訶路
 記茂乃之有ハ右第七ノ防ぐハ甘物あり同ト十二
 ノ邊羅須波何我記茂乃伽蘭支毛能ニ有テ右ノ下ノ

と開くと破ると碎くの法は同ト十三ノ每須婦波新
 保波遊喜母能ハ味別ノ新瘻波遊岐仁耶武流毛乃阿
 利と有テ結ぶと破るとハ大ニ違有リ新武喜阿河溼
 仁登豆流毛乃阿利と有るが如く似著々々々但其
 功。相反々事多クハ其定も有べト十四ノ
 登武流波訶漏玖仁賀紀毛乃ハ苦物ハ上件ノ如ク下
 すと破ると主ニ用うると其輕きハ却ると止るる
 可ト十五ノ伽波訶須波河魯玖加良記蒙奴と有ハ
 上の潤らすの反り被ハ甘を以テ治め此ハ辛きを
 以テ療するリ十六ノ壹羅勢留波河樂九迦漏紀茂濃

菅宗義抄本
と介加末

と有ハ辛味の輕き物を以て漏すとあり此波伽羅波
と中と本との法度よ就て其計く一方と示されたり
一者少一有けれバ其を体とし此を用と一して見合す
可き事あり又其用藥の事ふ至りてハ次ある河治味
歌致りり慨迺葛惠に至る迄の所即此は比校す可き
所あり○第五段よ云く河治味歌致ハ藥味の差別よ
て氣味の味の方の定説あり一は仁我理安治味仁於須押
毛乃河利有の仁我理公本草和名ハ龍膽和名衣也美久
佐一名介加奈防風和名波末須加奈一名波末介加奈
瓜蒂和名介加宇利乃保曾苦菜和名介加奈あどの介
加是あり於須也ハ右の合計ハ據て考ふるよ下すと破
ると碎くと散すととの四有て何れハ此ハ押す意あり

二は須婆哩阿旋味仁能暮須毛乃阿利有の須婆哩ハ酸り
き事あり上能暮須ハ酸氣ハ上小往く物なり故あり
三は鞍麻歸甘阿旋味仁由流米流毛乃阿利有の鞍麻歸ハ本
草和名ハ黄精和名阿末奈一名也末惠美甘草和名阿
末岐麻黄和名加都祿久佐一名阿末奈白薇和名阿末
奈音青和名宇末佐久一名阿末佐久馬陸和名阿米比
古あど有る安末少て宇末は通ふ是あり由流米流ハ
右の防全計ぐと潤わすこ緩めるとの三は用いたり四は
新武喜阿泥仁登豆流毛乃阿利有の新武喜ハ淡きあり
柳柿又栗扶ニナキあどの新武此は同ト登豆流ハ全計ハ閑

日本書紀傳二十九

るの件は用いたりの五は新獲波遊岐仁耶武流毛乃阿
 利の新獲波遊岐ハ鹹字此ハ當り耶武流ハ令計の
 下す所ハ在ハ下すハ破るるハ然る事あるを又無
 須婦波斯保波遊喜母能之有ハハ疑有て右
 四百三十八下
 ぶ云ハ六ハ盈俱剝阿地耳比良久毛乃阿利ハ盈俱剝
 ハ彫縹の義ある可ハ比良久ハ右の令計ハ見えざ
 りども驗ハ即彫縹る分ハ即開リす可き理あり七
 下阿波紀鞍鞅尼公米真羅須毛能阿利ハ淡きハ下
 る既廻爾惠ハ阿賦難岐聞能波飲之望良殊ハ有や此
 下近リす可き諸右の令計ハ透すと沈びりとの二ハ

無味物を用いたりのハ巡りす義あるハ以上で首
 るハ今一幸きハ當り事なきハ若くハ可良記阿地仁
 九階周毛乃阿利ハどの言の脱なるハ非トハ右の
 令計ハ依ハ須波去ハ可良久阿婦良安流毛濃云ハ
 有ハ上ハ此ハも押すと上すと緩めると開ると破る
 と開くと巡りすと有て上すハ下すの對あるハ其下
 す可き物の事の所見ざるハ必此一着何れもハ
 飲たり可ハ但幸味の事ハ右ハ比良羅久波可良氣乃
 氣乃毛奴又久駄仇波可良久仁賀喜毛能又還羅須波
 云ハ伽蘭支毛能又伽波訶須波河魯取加良記蒙奴又
 蒙羅勢留波河樂九迦漏紀茂濃之有て開くハ破る
 あり碎くハ散すハ乾くハ池すハ幸物を

今編註
河治本記七能

用ふれ下す古の一概ハ定む可くすも雖も此
の七首ハ幸と下すを漏せし事著明きハ上ハ石等
の如き下すと粗事の○第六段小云く師那迦蒙登
状の目トきを以云あり
加稜記蒙乃應聞紀蒙能志哪那哉蒙迺加他哉茂妓儼
滿志紀母能訶麗流毛濃と有る師那迦蒙登ハ藥品の
本を云あり一ハ加稜記蒙乃ハ輕(物)物として右の令計
ハ耶婦流波仁賀利安泊地乃可路喜毛能云又遊流
女流波安滿區訶路紀茂乃又加波訶須波河會玖加良
記蒙奴又蒙羅執留波河樂九迦漏紀茂濃と有る是ハ
其味ハ拍くずして質の輕きと云あり二ハ應聞紀
蒙能ハ重物の謂あり其令計ハ伏太須波云志波丰

遊久於母喜毛乃又志豆年流波於毛久河地奈喜蒙能
こ有る是ハ質の重き限を云ふ三ハ志哪耶哉蒙迺
嫩と嬌きたり由あり文選ハ氣纏を志那耶加とも
志那布とも訓ハ白氏ハ是是を讀り又嬌字をも訓ハ
を字書ハ長弱兒又風動兒とも注せり四ハ加他哉茂
奴ハ堅硬ある物の謂あり五ハ儼滿志紀母能ハ生ハ
き物より品より依てハ其生を尚ふ有る生蒙和名奈末
奈都女と有る類是あり六ハ訶麗流毛濃ハ枯在物
て謂ゆる熟物是あり生地黃ハ對ひて熟地黃とも乾
地黃とも云く類考合す可ハ右ハ輕(物)物と重(物)物と堅
と重(物)物と云く

然る氣の含ゆるを知て專其氣を取て其質を用ふる方と云ふ一舉られたるもの言ハ微小して其心深者よあり。○第八段より「給廻茂登耶貳慨鞍或解以漏啓弥圖鷄志多利該鞍武羅父那迷離希」と有る給廻茂登ハ謂ゆる氣之本とて次ある氣之末とハ其功能を云ひ此ハ其氣有る限の物を舉られたる者あり一ノ耶貳慨ハ脂氣二ノ鞍故解ハ灰氣三ノ以漏啓ハ色氣四ノ弥圖鷄ハ水氣五ノ志多利該ハ垂氣六ノ鞍武羅父ハ油氣七ノ那迷離希ハ滑氣なり其説ハ右より已み云り。此も若くハ古くハ八首ありハ非る凡在て此よある可き。○第九段より「慨廻萬惠ハ右謂なき事ありハあり」。

小謂ゆる給廻茂登ハ對へたり氣之末あり一ノ伽達利河流蒙乃波能褒副天伊耶之。こ有る伽達利ハ薰こ匂出る氣を云ふ能褒副天ハ上ノ升す事あり上の令計ハ能煩世類波可寶乃毛能又兜羅久波云く可遠離河流世濃。こ有る是めて内なる火氣と道きて上せ開出るあり二ノ球璿紀茂廻波夜武哩亮九佗周ハ臭氣有る物あり此を令計ハ識るハ仇太須波耳賀利阿地乃毛乃可良久阿婦良安流毛濃云く又耶婦流波仁賀利安地乃可路喜毛能加羅久阿婦良氣乃毛奴と所見たハ辛ニ苦の二小當り三ノ河治與枳蒙奴

波。由流女字流室須。と有る河治與枳ハ善味よて甘き
 物と云ふ右の令計ハ有類保須波阿未玖洋流室不裏
 迺又遊流女流波安滿區訶路紀茂乃と有る是るり四
 子鞞辭阿之紀母乃波半解斯九關須ハ右ハ甘きと善
 味と云て惡味ハ其反るハ辛と苦との氣を含有物
 を云ふり劇一く押二ハ右の等二ハ謂ゆる下すと破
 るこの類是るり五ハ計南寄母能波巴奚之可嚙受の
 計南寄ハ益氣よて此ハ劇一りうずと云ハ此並びの
 惡味物の氣を含有外ハ味惡一て氣せ含せざる者
 と云ふり六ハ阿賦難岐間能波既之望良殊のハ益味

物よて此ハ甘一とも辛一とも味ハいふ云べき所益く
 して氣味共ハ薄るるを云ふり令計ハ須訶士波伽路
 區阿治奈紀毛能又志巨牟流波於毛久河地奈喜蒙能
 と有て透すハ輕物の益味を用い沈しハ重物
 の益味を用ふ可き法度と所見たり彼此を合せ見ら
 ば此ハ押すと云ハ右の沈むる事ハ當り泄すと云ハ
 右の透る事ハ當ると云ハ所見たりけり右第一段ハ
 り此ハ至る迄ハ用藥の法るり各其病と藥と相應和
 ふ方有る事を示させて給へる者あり相照して此を考
 合するハ非ずてハ盡くす可りざるハ所思えたり

ければ彼此よ就て比技うる法有る事を今考得たり
 車石の如くあり但藥品の氣味に至りてハ神農本草
往さしし車石並げある物ヲ決めて高く意深き古
の神傳多れば唯其言義を注すたし其容易くを
を況て上下を相比校せば其成すに至りてハ他
の雜物有て其最勝しく成ぬ可き事ありハ他書を
多く引ずりて此一書を互しして説く者あり後世
中が志を継て神醫の方を起さしと爲る輩宜しく此
義を委しく明く今日の治療に於て活用す可き道
有を和り行ふ可き者あり但皇典の御學を口唱習ふ
が例の神仙ありちの怪しく遠る事共と引
出て医の傷寒金匱は留まらる物にして耻し何
も思へらぬ平田堂の○第十段よ云く知須地能和可
者ハ難云き事あり
 知和散能志南品表志留仁能里安里古礼乎知美知
 能濃里登伊布知能美知仁知能美知能久知知能美知

能南可中知能美知能於久阿利古礼仁與利天曾能和散
 能志南乎和可分別知天久須能利乎左陀六扁志と有る和
 須地能和可差別ハ血脉の動靜を診診脈絡絡の差別して疾病を察
 る事よて謂ゆる脈法是あり借此よ知須地と云ふ知
 ハ血あり須知ハ筋よて血の往來ふ道路あるが故よ
 次よハ此を知美知と書下て一物よて二名有るの
 上二百九ノ第二章ハ知之保奈利又須知奈利の下よ
 注せるが如く字鏡集ハ脈字を須知と云知能美知と
 云知能須知とも訓る是よて曉る可し一ハ和散能志
 南品表志留仁能里安里ハ次ハ曾能和散能志南乎

和可^別知天云々と有る應ふ備此和散ハ例の災少て上
 二百十七丁二ノ注せるが如く第一章其曾能奈^中訶美
 仁^纏登比先^為邪奈須^炎濃^物耶麻比止伊布^病と有て諸
 の疾病を云ふり志南^二ハ品品多り此例ハ傳十四
 八下ノ云り能里安里ハ有方又有法の如一二此古礼
 九下ノ知美知能濃^法里登伊布^云ハ知美知ハ次ハ知能美知
 と有て即右ノ謂ゆる和須地の事はあり和名抄ハ血
 脉野王云血^{和名}肉中赤汁也脉^{和名}知肉中血理也
 所見たり知美能濃^法里^里即脉法云事あり者あり三
 下知能美知仁ハ即血之道と云事あり血の衆て往来

ハ道路あり故ふ此を道と云ハ筋と云ハ法を地上ノ
 取心あり四ノ知能美知能久知^血知能美知能南^中可知^血
 能美知能於久ハ傳十六二五下ノ注せるが如く諸国の
 例前を道ノ口と訓之中を道ノ中と訓と後を道ノ後と
 讀む其を又道ノ奥とも云ふ是より此よてハ脉法ノ
 寸關尺と云て其前中後ノ就て脛がハ法有る云ふ
 可一五ノ曾能^其和散能志南^品和可知天^{差別}ハ其上疾病の品
 位を差別ノ事あり六ノ久須能利^藥辛左^可陀六^定志とハ
 第一章ノ故麗^是辛萬^禁自奈比耶^歌辛流仁能^自生^法阿^是里古連^是辛
 久須^藥乃里登伊布^云と見え輔^仁仕本^仁ハ故連^歌辛耶^歌辛留^仁

耶通乃能里哀差堂年。古礼乎久須能里止伊布と有る
此事を云あり。其ハの法と云ハ中巻第百五條ある味座
可一但此は藥方を定むと云ハ病の輕重と人の死生
とを能く見分つ事を主と爲る趣ありけむ。強し其
ハの法の難言なり。○第十一段云く伊喜散志波安免
都知能可世能伊里互有知能可世登安比互南留南里。
知美知能可與比能伊傳伊留伊喜散志仁比等志喜者。
耶末比南喜南里耶末比有知不安礼婆。知美知能可與
比美太留之毛能南里と有る伊喜散志ハ天孫降臨章
ハ氣慷慨と有る氣字を讀み私記ハ右の三字を伊
支波分之二有て伊伎と訓も常の事あり遊仙窟ハ氣

調を訓るを谷川翁ハ氣機イフキニの義ふゆと云れたり源氏
玉鬘四十下況こ監ガ伊喜散志一木伊喜氣ハし思出
りも忌こしき事限益しこ見え字鏡集ハ流を伊喜散
志こ訓と氣ハ伊喜又邪波比の二訓有り又常ハ心端
を伊喜散志とモ伊喜互加比とも訓ハと雖也此ハ唯
氣息の事ありこ心得べし一ハ安免都知能可世ハ天
地間の大氣を云あり此即第一章小謂ゆる阿萬乃保
氣乃計して第三章ハ保乃解波久知與里伊利波奈與
別波故備豆云ここ有る天の陽氣ふか此を可世と
云ハ其氣の迫りて往來ふ由の名あり事傳十十四子

十段に伊留伊留
語に比登志者
耶末比南喜南里
有以此と同一の
見ゆる

注るが如し二小有知能可世ハ臍下を氣海を云て風
氣の充る所あり是あり三ハ安比五南留南里ハ天地
よりの出入来りるを外風とし腹中より出行くを内風
として其打合ふ時臍に觸て響きを成し其響の外よ
出る時ハ其觸る所ハ隨ひて聲音を成し言語を成す
を云るの四ハ知美知能可與比ハ脉絡の往來を云ふ
ハ伊留伊留伊喜散志ハ呼吸の出入を云ふ六ハ比登
志喜者耶末比南喜南里ハ天地の氣息と脉絡の往
來と相共ありて邊連なきハ即無病の徴驗あり由る
り七小耶末比有知仁安禮婆ハ疾病の身体ハ在るを云

て次ハ其變を語るあり七ハ知美知能可與比美太留
ハ毛能南里之絡の往來と天地の氣息と相離れて合
ざる此を乱ると云て内ハ必病有る徴と爲る謂是ハ
即千金翼方小藏たり老子の語ハ人生天地氣中動
作喘息應於天地爲善爲惡天昏墜之勿謂聞昧神見
我形勿謂小語鬼聞我意人爲陽善人自報之人爲陰善
鬼神報人爲陽惡人自報之人爲陰惡神治之故天不欺
人示之以影地不欺人示之以響此皆自然之符也
有る此即天地と人との其氣の相應へる証徴なり又大智
度論ハ如人欲語時口中凡名憂陀那還入至臍觸臍響
出響出時觸七處是名語言と有る憂陀那ハ氣息の
名ありて此段の趣ハ合り又禪波羅密小用心住
憂陀那此云丹田去臍一寸半又摩訶止觀ハ正用治
病者丹田是氣海能銷吞百病若止心丹田則氣息調和
故能愈病即此意也丹田去臍二寸半ハ有る云り
○第十二段ハ云く日登能知美知能可與比波與都地

末利古能多備仁登度末留夜仁波多知末里與多備比
 仁波多知末利與多備阿波世天比登比比登與仁比登
 與呂巨美知末里耶本余尊能伊喜字比登之須之有ハ
 肺脈絡の相往之數を書さばたらあり一日登能知
 美知能可與比波ハ人の血脈の往來ハとあり二ノ與
 都地末利古能多備仁登度末留ハ四千九度ハ止する
 とふて其登度末留ハ極ある義あり但此事未思得ハ
 三小夜仁波多知末里與多備比仁波多知末利與多備
 ハ夜ハ二十四度晝ハ二十四度あり四ノ阿波世天比
 登比比登與仁ハ石の四千九度の往來を書夜ハ合せ

て其積を云あり五ノ比登與呂巨美知末里耶本余尊
 能伊喜字比登之須ハ一万三千八百四十の氣息有を
 人と謂とあり是即一呼一吸を一息と爲る法あり漢
 小ハ人の晝夜の呼吸を一万三千五百息と云ハ又一
 説ハ二十年旦暮潮汐の大數を計へて天地の呼吸一
 日一万四千四百息ハ一人の呼吸ハ一日ハ千四百
 四百息と云此を一息ハ動の數を以て推す時ハ一日
 八万六千四百の脈動有ハと云リ但理を以てハ強ハ
 推べりざら車ハ唯神傳と守るの外無くらむ
 ○第十三段ハ云く有加倍流有加倍流知須地登者有
 喜能能有美仁多堂與遍留我如志有喜之字押我如久
 指能知可羅仁志元志巨武礼婆形元指字多和耶可仁
 南世婆形阿留是者因能有遍乎南我礼由久南利古能

○日本書紀傳二十九
 ○四百四十

有加^浮信留^毛能者陽能氣天先成也。入乎病志武留仁至
五者知須^{血脈}地有^疾喜頭舉良須保^熱亮里安里多和語^成乎南
志免^眩久留免久南里之所見た^有四加倍流ハ脈法^ハ
謂ゆる浮あり一^有加倍流知須^脈地ハ血脈の浮べ^ハ
較略あり二^有喜能^海有美仁南多堂與^漂遍留我知志
ハ脈の浮べ^ハを浮木の漂^ハり^ハ譬へたるあり浮
木と云ハ水上^ハ流^ハく輕材を云あり三^有喜^{浮木}字
抑我如久ハ水上^ハ漂^ハる^ハ輕材を其上^ハ乗^テ押^ス事
を以^テ譬^スる^ハなり四^ハ指能知^カ可羅仁志^高亮志^沈巨武礼
婆形无ハ指の力^ハ任^セて押^沈此^ハ形^毎一^とよ^テ浮

木を強く押す時^ハ忽^シ沈^ミて形^毎一^とあり五
ハ指^字多^弱和耶可仁南^成世婆形阿留^有ハ指^小力^を入^サ和
く^ハ二^ハ押^セバ形^有り^とよ^テ是^ハ浮木を水上^ハよ^テ弱^ヤ
ク^ハ二^ハ押^セバ漂^ハし^ハる^ハり^ハ形^有り^ハ譬^ハたり^ハあり六^ハ是
者肉能有^上遍^流乎南我礼由^行久南^成利^ハ右^ハ強く押^テ形
無く嫩^ク小^ハ押^テ形^有り^ハ物^ハ血脈の肉上^ハを流^行く^ハ
る由^{あり}七^ハ古能有^浮加倍留^毛能者^ハ其肉上^ハを流^流
る^ハ物^ハ云^ハと^{あり}八^ハ陽能氣^天先成也^云ハ其
浮^ハる^ハ血脈^ハ謂^{ゆる}陽氣^ハ一^テ天先成也^云ハ此^を
天の位^ニ一^ハ肉を地の位^と爲^スる^ハなり^ハ此^ハ神也

七代章子其清陽者薄靡而為天略精妙之合搏易略故
 天先成而地後定之有合の上二百九小知之保奈利血液
 士因奈利成須知奈利成之有就て筋を謂ゆる阿斯利備訶
 ありと注せり考合す可し是即筋脈の浮べるハ天
 之火氣を合して血液の射往き循環らふ事を明し
 可き所あり彼第三章火條第四章水條合せ讀べく
 あり以上ハ常あり以下ハ變あり九ノ人字病志武留
 仁至互者ハ脈の浮ぶハ右件の如く人身の常なるを
 其甚く浮動く至りこハ入を令病る多し血脈十ノ知須知有疼
 巨喜ハ浮脈の強りハ疼有ハ十一ノ頭舉良須

ハ頭重き小て謂ゆる頭痛是あり十二ノ保元里安里有
 ハ上部ハ熱有を畿内の方言ハ今も云言あり十三ノ
 多和語護乎南志成ハ謔言を云るあり此ハ常ノ狂言を
 多波許登シタ云々ハ異あり舌境シタて云るハ多和不
 り十六ノ免久留免久南里也ハ和名抄也ハ眩和名女久流
 懸也目所視動乱如懸物揺然不定也也有是あり
 又文選也眩轉を免久留免久也亦免麻比也も割り
 右件有加倍流ハ脈ハ皮肉の間也流るハ當然の事
 時ハ愈浮上る此也就て頭眩也ハ感くる事也見え右
 の如く頭痛逆上也證語眩轉等の病有て其脈也ハ疼有る
 由あり第五章著豆條也ハ所見たる也如く眩也ハ血液
 あり成り物あり有け水也ハ怒り其應上也表ハる事

△喉程久行出熱
み：豊津上華
吹程久行出熱
苦者云々の類の者
多し

あり又云く其一小有可美波耶喜波能保且里南里と
有ハ浮速なる能保且里ハ上熱あり御記ノ作色愠色
赫然あるを於田本傳理豆と訓せたる即面大照して
物ノ怒る時ハ面ノ熱くあるを云あり此保且里ハ上
せて上部ノ熱くあるを云り二小有可美於曾喜者兩
露仁伊多武南里ハ浮速きハ雨露ハ犯されたるありて
上三百七小注せり味座乃倭訶知ノ第六ハ於非阿多
但波阿免布利紀利解都由解波太洋分於非と有る是
あり三小有可美喜備志喜者波耶知止美豆能今也ハ
浮嚴一きあり波耶知ハ早風よて倭乃倭訶知ノ第六ハ於非阿多
出雲ハ神事ト也耶智頭ト痛ト也熱里於在爾須留ト也ト云々
身取巨美ハ秘難兵流ト乃仁云々皇川華ト日痛頭痛久加波能美豆比勢邪

此ハ第四章水條ノ考合す可一四ハ有可美有淮氣多
留者夏日今仁伊多武南里ハ浮速けたるあり夏日今
ハ夏日氣よて彼味座乃倭訶知ノ第一於伽壺味坐ノ
中ある奈都乃解此ハ當々可一五小有可美有都今多
留仁心字都久信志伊多波里字南世婆伊由流毛能南
里ハ右ノ浮虚たり中ハ夏氣あるゆゑ有ハ心と著
て一治療を施す時ハ速ニ愈とあり何此ノ病ありと
ても決めて輕症ある由あり六ハ有可美知良今多留
者伊婆利登士末留南里ハ浮散けたるあり尿ノ留

るハ血液共ニ循環の法滞るガ為みのり七ハ有^浮可^物倍留毛能多知未知仁登^止度末留者比登能末^死可留
 南里^也と有ハ浮^也こべろ物ハ忽^也息多^也此の燈火の消
 ひとしてハ一度ハ明ろく成ガ如く浮^也浮^也びて常^也
 りハ健け^也見え^也あが^也忽^也斃^也る者あるハ其所^也
 心を着べ^也とあり^也右の七首と上あるとを合せて浮
 脈^也就^也ての言立あり多^也くハ表皮
 病有^也と上部^也熱^也り^也此二の^也あり^也ガ如く見え^也
 の^也諸上^也件^也ハ血脉^也疼^也より始^也り^也て浮^也速^也き^也浮^也速^也き^也と浮^也
 散^也け^也た^也と又^也一^也浮^也虚^也け^也た^也と浮^也散^也け^也た^也
 白^也と浮^也と浮^也び^也て忽^也絶^也る^也と^也凡^也て^也ハ八^也首^也あり^也
 ○身十四段^也云^也く波耶志^也ハ速^也り^也て脈^也法^也ハ^也謂^也ゆる^也數
 と云^也者^也是^也る^也り^也一^也ハ伊^出傳^入伊^出留^入伊^出喜^入仁^出比^出登^入志^出喜^入者^出耶^出末^出
 比^出南^出喜^出南^出利^出ハ^出上^出十^出一^出段^出小^出知^出美^出知^出能^出可^出與^出比^出能^出伊^出傳^出伊^出

比^病南^也喜^也南^也利^也ハ^也上^也十^也一^也段^也小^也知^也美^也知^也能^也可^也與^也比^也能^也伊^也傳^也伊^也
 留^也伊^也喜^也散^也志^也仁^也比^也等^也志^也喜^也者^也耶^也末^也比^也南^也喜^也南^也里^也ニ^也有^也ト^也同^也
 ト^也ニ^也伊^出傳^入伊^出留^入伊^出喜^入仁^出多^也我^也布^也波^也耶^也志^也登^也伊^也布^也ニ^也有^也
 ハ^也出^也入^也の^也氣^也息^也と^也血^也脈^也の^也動^也數^也ト^也韻^也語^也有^也ト^也多^也我^也布^也ト^也云^也
 あり^也次^也あり^也第^也四^也の^也下^也ト^也考^也ふ^也可^也ト^也三^也ト^也耶^病末^也比^也有^也知^也仁^也
 安^在留^也波^也由^也備^也辛^也波^也自^也久^也波^也自^也免^也須^也惠^也比^也等^也志^也喜^也波^也布^也久^也ト^也
 志^也能^也有^也知^也與^也利^也耶^也末^也比^也能^也伊^出留^入南^也里^也ト^也有^也る^也由^也備^也辛^也波^也
 自^也久^也ハ^也指^也鬚^也を^也彈^也ふ^也ト^也數^也の^也力^也有^也ト^也云^也ふ^也波^也自^也免^也須^也惠^也ハ
 ハ^也本^也末^也ト^也云^也ふ^也ハ^也如^也く^也又^也初^也後^也ト^也云^也ふ^也異^也あり^也ト^也云^也ふ^也比^也等^也
 志^也喜^也ハ^也此^也ト^也云^也ふ^也ハ^也指^也を^也彈^也く^也力^也の^也始^也終^也共^也ト^也云^也ふ^也ト^也云^也ふ^也

あり布久志ハ布久布久志と云べきを詞の重なる
不就て中の布の略りたりたるなり耶末比能伊豆留ハ
凡て肺藏不就たる病を候ふ状を云り四ハ伊傳伊留
阿比陀仁六都南我留ニ字波耶志登以布南里と云る
伊傳伊留阿比陀仁ハ右ノ謂ゆる氣息の出入り處
間を云るなり六都南我留ハ出入の氣息の間ハ六動
有と連一と云もなり十五段ノ邊を二度流是三度流
る。伊所見たるハ尋常の脈ハ五度ふるもて此ノ勝
過ると連と云ひ其及ハざるを以て邊と云て見えた
り五ハ有豆喜波耶喜者登喜能ハ二伊多免留南里ハ

有豆喜ハ速ふして疼有と云り登喜能ハ時氣あり
和名抄ノ度衣夜美一云度岐乃分民皆病也之有る此事あり
上三百四十九下ノ注るか知る此ハ疫癘ハ限らず
三百六十六下
凡て天行不正の氣ハ犯さるる瘡病ハ物を云て流災
乃暮登比ノ謂ゆる阿旨解王邪是多り彼味座乃候訶
知の中なる於伽壺味坐の皆ハ悉く是なり六ハ波耶
喜者都與與喜保凭理南里の波耶喜ハ上下ハ有豆喜
を云りハ此ハ次めて疼きあるは速きを云るなり都
與喜保天理ハ大熱を云るなり即疫癘ハ在る症あるハ
り七ハ有豆喜安流者有都多留仁心平都久信志南

我喜耶末比登南留毛能南里と有ハ疹の一症あり有
都介多留仁ハ疹有ハ速ク強キ者ありと其疹の有ふ
グシ虚けたる所有ハ殊ニ考ふる所有を云ふあり南
我喜耶末比登南留ハ長病の症ありとあり時氣又丈
熱の如きありハ却りて病の深キ入たるを云ふハ
耶末比有知仁安留波可南羅豆波耶喜毛能南利與久
古^心呂志天和可都遍志と有ハ上ハ伊傳伊留伊喜仁
多我布波波耶志登伊布と有ハ相對入る水たり可南
羅豆ハ必あり但豆ハ受ありてハ假字違へ水ども醫
書あり故ニ然る心用ひ迄ハ及ハれざり者あり

〇四百四十五

與久古^能呂志天ハ能心を用ふる事なり^{以上ハ首有}
る邊の反對あり互ニ見合する時ハ大ニ其意味深
りあり^{此速と診脈家ニ數と云ふを字書ニ頻也}
注^テ〇第十五段ハ云ク於曾志ハ違あり一ハ知須地
可與比能伊喜仁於久累^後ニ於楚志登伊布ハ前段ハ
ハ出入る氣息ハ前立を以て速ト云ト有る反あり
診脈ハ此を緩ト云リニハ比登能美能耶也多留波
耶須久安羅波礼ハ瘦た入りハ肉厚ク細キ故ニ脉絡
高く太キ如ク成て頭ツレ易トあり三ハ古^肥要多留
者由羅^緩ニ志ハ肥太りたる人の脉ハ緩トトて表
小頭ツレ難トの義あり四ハ耶末比有知仁安里天

〇日本書紀傳二十九

〇四百四十六

ハ病身ニ在ル時ハ脉ハ違ハ出ル乘ルを云フ五ハ知ル須ル地ハ
布多ニ備南ニ我礼美多ニ畏奈我礼ハ一息の間ハ脉動ノ
二三度ノ有ルを云フ六ハ伊傳伊累伊喜仁ハ於レ曾レ久志ハ
巨武波ハ於レ毛喜耶九比能安累南利ハ出入ノ呼吸ハ血
脉ノ往來トを合せ診ル其呼吸ハ後レ且レ沈ル者
ハ必シ重病有るハ多ク一ノ血脈ハ一呼ハ二度ハ一吸ハ
二度ハ其呼吸ノ間ハ一度ハ合ス
せて五度有るハ常ニ一ニ病ニ至ル壯健有るハ其ハ
進ルて六度至るハ速ニ一ニ及ス一ニて
二三度有るハ○算ハ十六段ニ云フ志ハ巨免流ハ沈ル
て右ノ浮ノ反ル一ハ須地登保祿止能間ニ流累登
耶和良伎天知ハ可多志ト有ル須地志ハ誤ルてハ

非ラ然ルハ須地ハ謂ユ血脈ハ經絡ハ血ノ道ハ
路ハ此ハ血脈ノ事ヲ筋ノ骨ノ間ニ流ル
と云フ非ラ然ル耶和良伎ハ和ハ波ハ
を誤ル筋ノ骨ノ間ニ流ルて浮ルて流ルてハ
強クて和クるハ骨ノ肉ノ間ニ流ルてハ外
和クるハ内ニ血ハ堅ク有ル二ハ布久呂仁ハ
左散礼ハ毛流我知志ハ左散礼ハ百葉ハ四十九ハ狭
保河乃小石踐渡ハ有テ此ハ小石ヲ詠ル但ハ十四ハ
一ハ信濃奈流知具麻能河泊能左射礼思母ハ有ル左
射礼伊思ハ約ハ和名抄ハ細石説ハ云フ磔ハ水中ハ細

石也和名佐 二有れば正しくハ石を云べきを略き

云らるり若て此和は血堅細石を盛和如くと云ハ石

耶和和良伎天知血堅多志と有和事の和啓言と此和置和此

者あり三指於與備子河具和礼婆可多知南無久と有和於

與備ハ和名抄和指唐韻云指和名由比俗于指也扣

和名於與比指間也と有和是和即脈を診ふ于指を

云らるり指を舉和形無和とい和脈の骨肉の間和沈む

者ハ皮膚の上和動氣和見和いれざ和故和細石を盛た

る袋も指を放和擧和時和和和ありあり和袋和の和有和

細石の形無和如く見和ゆる和啓言和ありあり和志沈巨武礼婆可和

多知安里和ハ指和強和く押和時和ハ形有和と和細石を

盛和た和る和袋和を和下和居和時和ハ正和細石の和俵和と見和ゆる

小譬和たり和此和沈和め和る和ハ上和ある和浮和べる和の和反和對和ある和此

い有和べき和を和何和れ和も和右和の和浮和へ和る和と和反和して和心和得和させ和じ

寫和載和る和い和さ和り和あり和又和其和文和の和傳和り和ぬ和ふ和も和有

ハ和第十七條和ふ和云和く和久和左和と和こ和こ和ハ和右和の和浮和速和遅和沈和の

上和就和きて和死和證和と見和種和の和車和共和百和を和載和り和たる和共

あり一和末和左和喜和久和安里和都和知須地南和可多和要和安累和者

眞田布南和須波和登和新和能有和知仁和末和可流和と有和末左喜久和

眞幸和みて和全和く和こ和云和こ和同和く和こ和末和可流和の和反和あり和景

破。と有る古軍記に伊能知能麻多祢年比登波。と有る
是より五葉二二十トト真幸有者 還見三二十トト小吾
命之真幸有者十三十トト事案之所佐国叙真福在與具
十五四トト真幸而伊毛我伊波伴伐十七二十トト麻佐吉
久刀伊比底之物能あは有て病無して身健りある事
と云あり和須地南可多要ハ脈血脈ト中絶有と云あり次
ト真田布ハ真木綿と云事あり傳傳ト二十百五トト注
とらハ如く皇太神宮儀式帳ト真麻木綿と書一祢直
譜圖帳ハ真蕪乃木綿と見之ト五葉二二十トトト神山之
山邊真蕪木綿短木綿と有る真麻木綿ト細ト割

たるを云ふトハ此ハ譬へたるハ極めて糸筋ハ如く
細ト脈細ト云ありけり右の如くハ太くして中絶え一
ハ細くして無知知くある共ハ其年と出ずして死る
證あり二ト美伎里日壹里比登志久南可多遍多留波
能美久比能伊多免也美登世能保土仁末可流ハ左右
共ト同トく中絶有る南可多遍の遍ハ要ハ誤ある
可ト能美久比能伊多免也ハ上三百七トト注せる味座
乃倭訶知の中あり能民區日阿太利是あり是即三年
の内ト死る可き惡症あり三ト奈我喜耶末地仁波可
仁布登久安留波志巨美可須可仁南留波安耶布之ト

有ハ長病の候多ク仁波可仁ハ卒ル多ク長病ニ成テ
ハ本より勢の微弱キ物あるを卒ルハ浮クテ太ク成
リ沈クテ細ク成リハ危キ症ありとあり四
ノ末可里南保喜日止志可羅豆知可羅安利元都與喜
波登美仁末可留。と有る末可里南保喜ハ其屈伸ハ依
テ曲直有るを云あり日止志可羅豆ハ等一ツツ多ク
ハ豆ハ受多しを誤ル少テ不の義あるあり登美仁
ハ急ルあり曲直相等一ツツテカ強キ者の急ハ
死ル可キ微ありとあり此ハ己ハ血脈ハ狂ハ有テ或
ハ伸ハ又ハ屈アリハ曲
ト直キト共ハ相整ハざラハ云多ク先ハ右ハ五ノ末
謂ゆる中絶ト云ハ相近キ状ある者ありリ五ノ末

左古能志久類々奈可流流如南留波可南羅豆末可累死
ハ末左古ハ真砂あり知名抄ハ織砂日本紀私記曰萬
古織細也奈有る是あり志久奈ハ望仁天皇廿五年
御紀ハ重を志伎ニ訓ハたる是ハ重奈又ハ頻奈の
義あり奈可流ハ織砂の水中を浮沈奈して流る
ハ譬奈ハ此ハ万葉十一三十ハ小監満者水沫ハ浮細砂
裳奈ト有ル其意を得ベシ可南羅豆の豆例の違ハリ
六ハ知可羅安利元都末能有裳有宇武須倍累可南流者
血安盈出天末可累死も有ハ上あるハ砂の水中を流る
ハ比ハ此ありハ玉緒を結べるハ譬奈ハ此ハ血奈

淀有りて武ハ破の如く又ハ玉の如く塊水ヲ状ふる
 を云あり多末能衰ハ玉緒あり武須信累可如ハ玉
 緒を結留たふが如く一ノ^脈絡の間ノ節の如く^物物の出
 来^水水と云あり知安盈天ハ血出てあり血ハ阿由流
 三ノ事ハ上^{三百四}十下^十小注り七小知良^散人多留波比登能
 末可流南利^七と有る知良ハ散乱ル^七脈行の定^七
 ざると云ありハ小比登^時と喜仁止土末里末多喜多里
 佐^不陀万羅奴毛能可南良須末可留ハ一時ハ止り一
 時ハ動きて^七脈絡の往來定^七ざる者ハ必死ると云
 り以上八首ハ死脈の太^物物あり九ハ知須地仁^依樂利天

伊久羅能耶万比^{義許}和^{左別}知末多耶免留比登能日^左陀里
 仁^居字里美伎能比^膝佐字志喜比^敷里能非^左佐字多天^立耶
 美比登能南^人可波羅字美伎能^腹見仁^右佐具里志南^探二
 能和^災左字志里久須^和乃里字佐陀武^方遍之^定有ハ診察の
 法を示されたり其知須地仁^{血脈}與利天伊久羅能耶万比
 字和^{左別}知ハ上件^{血脈}の第十段知須地能和^{左別}知^下り以下
 の結^七めて疾病を診察するハ先其脈を以て主と爲る
 由あり末多ハ又もて其上ハ猶又腹診の法とも合せ
 用ふ可き事を云ひして置るあり耶免留比登能日^左陀
 里仁^居字里ハ其診がふ人の席^七著く法あり美伎能比^右

佐乎志喜ハ右方の膝と席上敷敷多り此堂里能非佐
字多立天天ハ臥させたり病人の傍立居て左の膝立を立
るを云ふ南中可波羅腹辛美伎能天仁元佐具里標里標ハ右手
と以て中腹の上を探る事あり志南品能和左手志
里ハ脈候ニ腹診をを合せて其品の災をを知り病の
本著く所以を究むる事あり久須乃里手佐陀武遍之
ハ第十段知須地能和可知差別の所も曾能其和散能志南
辛和可知天久須能利手左陀六遍志定と有一事あり
偕此大同類聚方右。如く脈診の法を委委しく書
たされしども腹候の事至りてハ此は其事を示す

ぐ其法を傳滿されたるハ當時世は遍く口傳へて
醫生の行ふ事あるが故ある可し然る時ハ大己貴命
少彦名命より傳りて武内大臣命至りて大己貴命
け其より世は弘りりて今日は至る迄天下は在と有
ゆる醫こして其事を行はざる者ありをけりけりハ不
知こも我が皇神等の恩頼頼を蒙奉り居る事と天下
小醫人多くハ漢ハ非ハ蘭ハして其法を日こ小用
ひるがる其恩頼を忘れ奉る事ありは浅きも何と
も云へハ更る事ありけり且其漢蘭の醫法の如き
ハ我皇神等の風土は應せて各國の人共を治病を療め

さて給へる方法を建置て給へるよ次よ増補して
其事の委しく成りたる事ハ我ハ皇神等の恩頼の外
ハ非らるる然ゾ此藥を用ふる事ハ至りてハ彼此
風土の違有り食物の異有て謂ゆる柱^{コナキ}膠す可き
非らざる其辨別も無く漫ル彼を是とて此を非とて
各新奇を衒ひ小驗を弄して俗民を誑惑し金帛を貪
りて良民財を掠むる者少りず我神明の罪人ハ非
ずして此を如何と爲む但此ハ外国の藥を用ふる
然るハ非ず我神代の
藥方マ雖も古マ今マ諸人共ニ食物の調ヘ方同ト
クゾ事今世マ都鄙を等しく爲ベクゾ
ガ如シ其神方ハ依テ略を用ふるハ非ルガ其施用毎
ラ可きを况テ畜肉を屠喰ふハ我の醫方ム

小心用い盡てハ得有る事あり其辨へも盡く
己ガ意ハ任せて神民を^天折てさすところ味氣盡き
事あり○少彦名命採藥の御事を爲させ御在り坐し
けり現證ハ本草和名ハ石斛を和名須久奈比古乃久須
祢と有も此大神の初て見出させ給ひ其能を所知食
て世よ用いさせ御在り坐しけるを以らる此事ハ合せ
て秘庫器録ハ少名彦那神載粟到常世之國之時於海
邊國神賜ハ瓊勾玉掘藥州と有ハ甚美たり傳あり
此神の粟ハ載て常世國小渡りて御在り坐し事ハ此
御記もも出たるを其渡り御在り坐しより以後ハ御
事としてハ唯此傳有のる其於海邊ハ彼潮沫の



南政官
内庫

文庫

疑以て成なる外国ハ一も其疆廣大ありて此神の渡
り御在り坐し始るどハ甚開けざり一事よて猶海
邊の国との粗国形とも成せり一と所見たり国神
其国を主領き居る地主神の事あり賜ハ坂瓊句玉
と云ハ美玉珍珠を此皇大御国より持渡りて御在り
坐て外蕃の地主神共よ此を賜ひ藥艸を令採給ふ功
よ幣よりて給へるあり堀藥艸と云ハ唯今堀出
め給ふのよハ有べくす其令堀給ふ藥艸を以て
各自の嘗試とせ御在り坐て其氣味と功能とを辨別
させ給へる御事ありよて上第三段あり波伽羅波計在

